

薬剤師として、女性として

堀 美智子

(株)エス・アイ・シー医薬情報部門責任者

私は、薬剤師として、薬局の店頭で更年期症状を訴える様々な患者さんに接した経験から、更年期障害については、ある程度の知識を有しているつもりでいました。しかし、自分自身が更年期に入ると、月経が不規則になり、月経周期が短くなったり、長くなったり、また不正出血が起こったり……、そんな体の変化に「もしかしたら子宮ガン?」と悩んだりしました。検査の結果、ガンという考えは杞憂であることがわかりましたが、「そろそろ閉経するのでしょうか」という言葉に、女性でなくなってしまうような、なんとも寂しい気持ちになったことを憶えています。あれあれどうしたのと思うほど顔から汗が出て、そうかこれがホットフラッシュかと納得しても、化粧ははげてしまってまったくだめ。今、私は様々な更年期症状を経験するようになり、更年期障害についてわかり始めたといったところでしょうか。

人間というのは勝手なものです。物事はいつも自分というフィルターを通してしか、見る事ができないのですから、結局「知っている」というレベルから、「わかっている」というレベルになるのに、体験ほど強いものはないのかも知れません。

でも、いったん更年期障害についてわかってくると、今までの顧客や患者さんへの、薬局での対応がいかに表面だけのものであったか、店を訪れた

AさんやBさんは、どんな思いであの相談をなさったのだろうか、と反省することばかりです。

更年期症状の中には、なかなか

口に出して相談しにくいことがたくさんあります。たとえば、薬局では、性交痛を和らげる潤滑ゼリーのようなものも販売しています。以前は、これらの商品については、あまり話をせずに黙って商品をお渡しすることがやさしさだと思っていました。しかし今では、更年期症状の症状について会話をするなかで「痛いから止めてほしいと泣いて頼んでいるのだけれど……」といった女性の本音を聞くことや、膣の萎縮に対する治療の必要性を感じ、病院の受診を勧めることもあります。

私は、1人の女性として、結婚、出産、育児、そして両親の死の看取りを経験し、今、更年期を

迎えました。マタニティブルーのうつ症状、母乳の出ない苦しみ……。これらの1つひとつの経験が、1人の人間としての私の幅を広げていってくれたように思います。そして私のこの体験は、特別なものではなく、多くの女性が経験していることです。体験した

人にしかわからないことが多いのですから、多くの女性が、女性として、女性の心や体について、体験した様々な事を語り、経験を共有することが大切になるのだと思うのです。「更年期障害? そんなもの何も感じなかったわ」「疲れてね」「うつ症状が出て大変だったよ」「膣萎縮が……。こうした語りから1人ひとりが個別的な存在である「人」を理解できるようになるのではないのでしょうか。

更年期障害について、多くの人が本音で話し合うこと、そして更年期を更なる年の出発点として前向きに取り組んでいけたらと願っています。

